

かつて日本の山野に君臨していたヤマイヌ(オオカミ)は世界的にみるとかなり特異な固有種ということです。大陸のものと比べると身体が大変小さく、薄明性でむしろ犬に近い種だったようです。現在でも多数山村に残されている頭骨、歯などからすると飼い犬との交雑も多かったとも考えられています。有名なライデン博物館にあるシーボルトが持ち出した全身標本ものの分類では「ヤマイヌ」となっています。これは古来古文書等の記述がオオカミではなく「ヤマイヌ」であることにも良く合致しています。(もっとも一方でシーボルトは大坂天王寺で「オオカミ」も購入したが輸送中に失ってしまったとも記録しており、オオカミとヤマイヌの違いを明確に意識していたようです、日本に2種類の山犬がいると考えた！)。

さて私は、この里帰りしたヤマイヌの剥製を名古屋市博物館で実見しています。精悍な迫力はまるでなく、むしろ子犬のように可愛らしい印象がしたものでした。脇腹には美しい栗色が混ざっているということですが薄暗くではっきりと確認できませんでした。

多くの村人にとってヤマイヌは家畜を襲っても人は狙わず、むしろ害獣である鹿を減らしてくれる有りがたい存在だったようです。「送りオオカミ」という言葉も人の縄張りである村まで安全に送り届けてくれるという好意的なものでした(もっとも転ぶと襲いかかってきて食われてしまうので後ろを振り向いてはいけないとかの恐怖心に彩られてはいますが)。

かつて参、遠、駿、信州の山村からは「キツネツキの治療」や獣害退治のために山住神社などへヤマイヌ様のお札を貰い行く代表者が多数参詣しました。この時かならずヤマイヌ様が見送りのため後を付いてくると信じられました。故郷の村が近づくと追尾の気配は遠ざかり、村人は安堵とともに感謝したという話が数多く伝えられています。ただヤマイヌは塩分補充のため人の尿が舐めたかった、スカベンジャー(死食肉者)として尾行していたと説明する人もいますが、いずれにせよ恐れとともに称えられるべき霊獣的存在でした。

ヤマイヌは公式記録では明治 38 年に絶滅したといわれますが、平成の『南アルプス深南部』の山の犬段頁には「狼とも野犬とも違う山犬が群れをなして何度も鹿を襲う姿を見た」という猟師さんの話が載っています。昭和高度成長期の頃と思われれます。このように現在でもヤマイヌ(オオカミ)の生存のロマンを信じる人が後を絶ちません。全国に山犬の形をした高麗犬は多く、作手白鳥神社でも可愛らしいヤマイヌの高麗犬を4像ほど確認しました。(M)

